

受賞の挨拶

河合隼雄物語賞の受賞はまったく予期せぬ知らせで、たいへん驚きました。

河合さんがなかく言及されてきた物語やお話とは、どのようなものであったか。読者が登場人物に肩入れするうちに、代わり映えのしない日常から離れて、男であったはずの自分が女と入れ替わってしまったり、あるいは魔術を使って自分の影を呼び出してしまい、自分の影と戦わなければならなくなったりする。そんな異世界にまぎれこむあいだに、私たちの魂が、物語の中にあるなにかと触れて、魂が反応する――そのような深いことばの器の意味である、とおもって参りました。

「光の犬」は人が生まれて、人が死にはするのですが、誰も経験したことのないような不可思議な出来事はなく、手に汗にぎる場面もなく、物語の最後に登場人物は、床屋でヒゲを剃られながら居眠りする始末です。

河合隼雄さんは、「うそつきクラブ」の会長も務めておられました。近頃は、嘘の価値が著しく落ち込み、嘘は魂をゆさぶり、おもしろがらせるものではなく、自分を守るための単なる言い逃れの手段になり下がってしまいました。人を怒らせ憤慨させる嘘ばかりで、たのしい嘘、だまされて唸る嘘、たましいに触れる嘘は、どこに消えてしまったのか。空から現状をご覧になっている名誉会長は、さぞ嘆かれておられるのではと思います。

私も小説を書くようになると同時に、「うそつきクラブ」に強制加入させられましたので、立派な嘘つきになるうと心に誓い、今日まで努めて参りましたが、しかしながら、上手な嘘、人をおもしろがらせる嘘をつくのは大変にむづかしい。いまだにわたしはおもしろい嘘をつくのが苦手で、「うそつきクラブ」の見習いとして、はかばかしい成果をあげられずにいます。

このような自己評価からすると、「光の犬」で河合隼雄物語賞を受賞というのは、私には過褒な評価ではあるまいか、とやや心配になりました。

しかし、しばらく時間が経って、河合さんについての記憶を蘇らせる日々のなかで、河合さんのホームグラウンドであった臨床心理について思いをめぐらせたとき、「光の犬」の書き方が、そのお仕事とどこかつながっていたかもしれない、と気づきました。

「光の犬」の登場人物は、生きること死ぬことの、わからなさのなかにいます。しかし、それは作者がコントロールして描いた世界ではありません。作者もわからないまま、ただ黙って彼らのことばに耳を傾け、聞くようにして書きました。臨床心理のお仕事は、クライアントが断片的に、とつとつと、未整理なまま話すことを、ただ聞くことであって、性急な解釈や助言はかえって邪魔になる、という河合さんの考え方も、それは重なります。

そのことに気づいたとたん、この賞をいただいたありがたみが初めて、光のように全身をつつんでくれたと感じました。選考委員の皆さん、候補にあげてくださった皆さん、ほんとうにありがとうございました。

受賞してしばらくして、河合さんが夢にあらわれました。十二年ぶりの再会でしたので、感無量になり、先生に近づいて、お礼を申し上げようとすると、先生は後ずさりされ、「わたしはカンケーない、わたしのせいじゃない」と左右に手をふられるのです。そして最後に、囁くようにこうおっしゃると、笑顔とともにスーツと消えてしまわれました。

「光の犬も、歩けば棒にあたる、ゆうてね」
ありがとうございました。